



2020.4.30

Vol. 62

# 北海道サケ ネットワーク Newsletter

発行 阿部周一

事務局 高橋壽一 札幌サケ協議会  
〒006-0839

札幌市手稲区曙9条1丁目10-25

Tel/Fax: 011-681-4268

E-Mail: jaytaka@carrot.ocn.ne.jp

URL: <http://salmon-network.org/>

編集 寺島一男

E-Mail: [tera2112@potato.ne.jp](mailto:tera2112@potato.ne.jp)

会員の皆さんには新型コロナウイルスの拡大に伴い、仕事や生活面で大変なご苦労を強いられている毎日だと思います。この難局をぜひとも心を合わせて乗り切りたいものです。



春を待つ石狩川（2月・当麻町）

## お知らせ



2020年度総会開催の中止

皆さまには、平素より本ネットワークの活動に対するご理解とご協力を賜り、誠に有難うございます。

2006年の本ネットワークの設立以来欠かさず続けてきた総会・サケ会議の開催について、今年度は5月30日（札幌エルプラザ）に予定しておりましたが、国内の新型肺炎 COVID-19 の流行が止まず、国の緊急事態宣言や道内感染拡大第2波の予兆などにより事態終息が一層不確実となったことからやむなく中止とすることに致しました。

総会・サケ会議開催の可否について、本来、皆さまのご意見を頂くべきところではありますが、感染状況分析と開催に係る議論を事務局・役員会において2月以来月ごとに続けてこの度の中止決定に至りましたこと、お詫びと共によろしくご了解下さるようお願い申し上げます。

今年度の総会議題につきましては、後ほど、メールにより皆さまにお送り致します

ので、ご議論・ご議決頂きますようお願い申し上げます。サケ会議につきましては、今年度の予定テーマと講演内容を来年度に繰り越しさせて頂きます。

なお、ご意見、ご質問などございましたら、事

務局宛にお寄せ下さい。末筆ながら、皆さまのご清栄を心よりお祈り申し上げます。

北海道サケネットワーク代表  
阿部周一

## EVENT NOW



サケの放流とカムイノミ

「あさひかわサケの会」と「大雪と石狩の自然を守る会」が共催、「旭川チカップニアイヌ民族文化保存会」「旭川龍谷高校郷土部」が後援する第37回サケ出発式とカムイノミが、2020年3月29日旭川市を流れる忠別川のツインハープ橋下流で行われました。

新型コロナウイルスが広がってきたため、出発式のセレモニーは中止し、放流は持参した人が随時放流する形で実施されました。旅立ちの無事を祈るカムイノミが行われる中、約3000尾の稚魚が子どもたちに見守られて次々と元気に出発しました。

2020年4月2日(木曜日)北海道新聞

## サケの無事祈り「元気でね」

旭川・忠別川



サケの稚魚を放流する親子（宮永春希撮影）

市民が稚魚を放流する「サケ出発式カムイノミ」が旭川市旭川の忠別川で行われた。親子連れら約500人が元気で無事な旅立ちを祈りながら稚魚約3千匹を川に放した。（山田いずみ）

旭川の市民団体「大雪と石狩の自然を守る会」と「あさひかわサケの会」が18日から約2週間、毎年のように行われていた。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止して屋内で一部開催する。旭川市旭川の忠別川で、親子連れら約500人が元気で無事な旅立ちを祈りながら稚魚約3千匹を川に放した。天候も良好で、見守る親子も多かったと語った。

## Event Report

SWSP

2020市民フォーラム

「サケと生きる」をテーマに、札幌ワイルドサーモンプロジェクトが主催した「市民フォーラム2020」が、1月25日(土)札幌エルプラザ3Fホールで開催されました。

SWSP 活動報告・基調講演・パネルディスカッション・学生ポスター発表・札幌大学ウレシパクラブ（劇と演舞）など多彩な催しが行われ、多数の参加者で賑わいました。

活動報告では、SWSPの藤井和也さんが、豊平川における分流復元やサケ稚魚の降河モニタリングの取り組み等を報告しました。

基調講演1「サケから見たアイヌ社会」では、札幌大学教授の瀬川拓郎さんが、江戸時代後半から和人のサケ漁によって、次第にアイヌの主要な交易品だった干鮭（からぎけ）が商品としての地位を失い、アイヌの主食がサケ化したことなどを取り上げ、人とサケの関係が歴史的に大きく変化してきたことを話されました。

基調講演2「三陸からみたサケと人との関わり」では、東京大学大気海洋研究所教授の青山潤さんが、三陸独自の地域のサケ文化の特性について触れながら、サケと人間の新しい構築には「ウイーク・タイズ」（弱い結びつき）が必要ではないかと話されました。

パネルディスカッション、札幌大学ウレシパクラブによるアイヌ文化の紹介、中・高生によるポスター発表&SWSPコンペティションなども、実に盛りある内容でした。

盛りだくさんながら、焦点の定まった中身の濃い素晴らしいフォーラムでした。

(Tera)





## SERIES—第4回

### サクラマスとわたしたち さげます保護水面管理事業調査 (その1)

河村 博

保護水面管理事業調査でもっとも関心が向いたのは、流下生物調査でした。川の流れて流下する動物、特に水生昆虫と呼ばれるカゲロウ、カワゲラ、トビケラ、ハエ目(ユスリカやブユなど)の幼虫は、一日のうちで決まった時間帯に流下数の増すことが、田中光さんの研究で明らかになった時期でした。サクラマス幼魚(いわゆるヤマベ)の餌は、まさにこれらの流下動物なのです。

「よし、餌になる流下動物の量を、川ごとと季節ごとに明らかにしてみよう」と考えました。就職1年目の秋、私は日高地方のえりも町に新設された「えりも支場」に赴任していました。6年後に三人体制になりましたが、赴任当時は二人体制で、サケの増殖事業と調査を受け持っていました。保護水面2河川、日高幌別川と仁雁別川で季節ごとに流下量の日周(24時間)変化を調べることになりました。

えりも支場で足掛け6年間仕事をしておかげで、日高幌別川のサケマス保護水面管理事業調査も6年分のデータを得ることができました。今では簡単には行えませんが、一人で奥の支流の林道に車を止めて、3時間ごとの流下動物採集はスリルに満ちた経験でした。日高地方は名うての山おやじ(ひぐま)の産地であり、夜間ライトを消して沢の採集トラップに近づくまでの緊張感は一瞬半かなものではありませんでした。

た。ライトを消す理由は、光に集まる昆虫の影響をできるだけ排除するためです。携帯ラジオのボリュームを上げ、車のクラクションを鳴らしてから行動を開始しますが、無事にもどれたときの安堵感もまた格別でした。

一方、楽しい経験もありました。天空の夜空の星たちの景観は、現在では家庭においてテレビやビデオで鑑賞できますが、当時は高い山に登るか、人家のない場所で見なければ見ることができないものでした。それが、横たわったシートのフロントガラス全面に出現し、時間の経過とともに移り変わっていくのです。天の川が、見る時間帯によって、あんなにも変わるものだとは思ってもよかったです。たいせつな思い出のひとつになりました。

季節的な流下動物の日周変化調査で分かったことは、日の出と日没の薄暮時にその量が増すこと、落下昆虫と呼ばれる陸生動物群(クモなども含む)も春から夏に増加すること、秋になり水温が低下すると極端に流下動物量が減ってしまうこと、などが明らかになりました。これらはすでに他の研究者により明らかにされていたことです。

その中で私が注目していたことは、後で詳しく述べますが、サクラマス幼魚の成長の季節変化が、これら流下動物の量的、質的变化とどのようなからくりで関係しているのかという点でした。えりも支場を離れてからまとめた報文(「サケマス保護水面の調査 日高地方のサクラマス」魚と水21号)では、限られた川の餌資源を有効に利用するために、サクラマス幼魚は降海型、河川残留型、小型幼魚の3群に分かれ、それらが住み場所(餌)を分け合うことでグループの成長が調整され、効率的に降海型を産み出すと考えましたが、大きな

自然の移り変わりのなかで、餌となる流下動物量の季節的な変化と幼魚の成長を理解するまでには至りませんでした。

その答えはおよそ20年後に出版された、故中野茂さんの論文集で腑に落ちるところとなりました。その詳細については、後述される「サクラマスのくらし 川の生産力と生態系のつながり」の部分でお示しする予定です。

この他に興味をもった調査項目に、サクラマス幼魚の季節的な成長と魚類相調査があげられます。

(北海道サケネットワーク顧問  
・元.北海道立水産孵化場長)



## 連載

さげア・ラ・カールト  
(その7)

### 泳ぎのトレーニング



「達人は生まれながらにして達人」とは行かない。泳ぎの達人「サケ」も、生まれた砂利床から出て泳ぎ始めたときには何ともおぼつかない。それが、やがて海に降りる頃には達人の域である。それにはたゆまぬトレーニングがあった。

餌は川底に住む水生昆虫(カゲロウ、トビケラ、ユスリカ、ヨコエビなど)や木から落ちる昆虫(ダニ、クモなど)。水生昆虫なら川底に行けば餌の宝庫で簡単に捕まえられるのだが、彼らは潜って餌を捕らない。流心の強い流れへ泳ぎだし、流れに必死に逆らいながら流れてくる餌を狙い定めて捕食する。

間もなく疲れて流れに流されると、川下の岸に寄り、岸際の緩い流れを上ってまた急流に飛び出して流れる餌を捕まえる。一見この不合理な習性には

強靱で俊敏な体を鍛えるという重大な目的があったのである。

やがて海に出た稚魚たちは、ようやく稚魚と一緒に流れ込んだ雪解け水で爆発的にプランクトンが発生し、口を開けると餌にありつく楽園なのだが、外敵となる魚や鳥たちにとっても楽園である。

おそらく生まれたサケの80%は、その沿岸で犠牲になるだろうと見られる環境である。稚魚の助かる道はただ一つ、出来るだけ素早く逃げることだ。あの、川で見せた急流に逆らったの過酷な餌捕りの行動は、このときのためのトレーニングであったのだろうと気づかされるのである。

